

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101956		
法人名	社会福祉法人 伸生紀		
事業所名	グループホーム画図こもれび		
所在地	熊本市東区画図町所島305-6		
自己評価作成日	令和3年1月12日	評価結果市町村受理日	令和3年4月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	令和3年2月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・食事や水分摂取の状態や変化に速やかに対応し、必要に応じて医療と連携し、安定した体調を保っている。 ・行事を多く計画し、日々の生活を楽しんでいただけるよう柔軟に計画している。 ・おやつを手作りしている。 ・ご家族に積極的に声をかけて、行事や会議への参加を促すだけでなく、家族と一緒に外出する機会を持つなどして、ご家族とご利用者の関係性が途切れないように、双方に支援を行っている。 ・日頃から清掃に力を入れ、清潔な環境保持に努めている。 ・法人全体で、4つのゼロ(おむつゼロ、誤嚥性肺炎ゼロ、脱水ゼロ、身体拘束ゼロ)を掲げ、ご利用者の当たり前の生活を支えるための指標として、職員一丸で取り組んでいる。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>二つのユニットの管理者は、一つのチームとして常に情報を共有し協力してサービスの提供を行っている。地域密着型事業所として地域との交流を密に行い、入居者が地域の祭りやイベントで人々に出会い、交流が継続できるように支援している。また、年に1度、「思い出の地巡り」と称して入居者一人ひとりが行ってみたいと思う所へ行けるように、家族と共に綿密な計画を立てて準備を行い、望みを実現する支援に取り組んでいる。法人全体で目指している「4つのゼロ」に丁寧に取り組むことで入居者全員のオムツ使用はゼロとなり、布パンツ使用が当たり前の生活に改善され、快適な排泄の自立を実現している。皮膚のトラブルもなく、経費も軽減され、本人と家族に喜ばれている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新人研修や中途採用の職員にも、研修で理念についてしっかり学習の機会を設けている。 毎朝、朝礼時に基本理念の唱和と目的を確認し、意識づけを行っている。	法人の基本方針「こもればの日差しのように穏やかでキラキラと輝かれますように支援します」をホーム職員で共有し、ケアの拠り所としている。イベントや行事に参加している入居者の表情を写真等で振り返り、楽しそうな様子が見られるかを確認し、次のイベントに繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の区役や祭りなどのイベントに参加することで地域住民との交流を図っていた。 地域交流室の活用を目指し、環境を整えることで地域に開かれた施設づくりを目指している。	地域の神社で開催されるお祭りに、入居者と職員が参加したり、近くにある川の藻をとる区役や、江津湖ウォークラリーに職員がボランティアで参加するなど、日常的に地域とのつきあいを行っている。コロナ終息後は地域交流室を開放し、地域の人々との更なる交流を行いたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の健康クラブや行事に参加し、認知症の支援を行っていることや、地域交流室の活用について伝えてきた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため集合しての会議開催が困難で、書面での開催になっているが、行事報告や、ご利用者・職員の変動、事故の報告などを行い、意見交換で出た意見をサービスに活用している。	本年度は、対面での会議開催が難しいことから、熊本市介護事業指導室に確認後、「状況報告書」等を運営推進会議委員と家族に2か月ごとに郵送し、意見や要望の提出を依頼することで会議に置き換えている。委員や家族からは、報告書に関しての意見やコメントが寄せられている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	随時連絡を行い、協力関係を作っている。	職員は、地域包括支援センター主催の「徘徊模擬訓練」に認知症老人で参加したり、ホームが「認知症サポーター養成講座」を行う際は、区役所に相談して情報を得るなど、協力関係が築かれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内の研修で学ぶ機会もあり、職員全体に何がいけないのか伝えている。法人として身体拘束はいかなる場合でも行わないこととしており、それに基づいて、開設時から身体拘束は行っていない。	「身体拘束ゼロ」は、法人全体で目指す「4つのゼロ」の一つであり、担当者を中心に定期的な振り返りを行っている。また、ケアの現場での気づきは、お互いに注意しあえる環境整備に努めている。スピーチロックとならないように、常に言葉遣いに配慮し、言葉の言い替え表を作成するなどして身体拘束ゼロに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日頃から不適切な言葉遣いはその場で注意し、虐待防止への意識づけを行っている。法人全体で、毎月行動を振り返る機会があり、反省点を翌月に活かすよう努力している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修に参加し現状を理解できている。職員の中には制度を知らない職員もいるので、今後研修に参加するなど、学ぶ機会を作りたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は全て管理者で行っている。疑問点や家族の要望を尋ね、丁寧に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には全家族に案内を行い、多くのご家族からご意見や要望を伺い、運営に反映させている。	運営推進会議には家族の参加を促し、通常4～5家族が参加している。家族会も設置されている。「認知症について学びたい」との家族の要望に対して「認知症サポーター養成講座」を開催したり、「誤嚥性肺炎が心配」との声に歯科の訪問診察で口腔ケアを受ける手配をするなど、其々の相談に丁寧に対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	部署ミーティングや申し送りなどで意見交換をし、できるだけ意見を反映できるよう努力している。	今年度は対面での部署ミーティングは三密を避けるため実施せず、其々の職員が意見や検討事項をパソコン内に入力し、それを二人の管理者が取りまとめて検討し運営に反映している。	部署ミーティングが開催されるまで、ユニット毎の少数職員で、ソーシャルディスタンスに配慮しながらのミーティングを開くなど、双方向のコミュニケーションが取れる工夫を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	上司が各職員の評価を行う機会があり、それを基に評価に反映されている。現在、人事考課制度について見直しを行っている。有給を消化できるよう残日数を確認し、積極的に取得してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に合う職員を選定して積極的に参加してもらっていた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者が中心になり、地域の交流を行っている。職員から他のグループホームを見てみたいと意見が出ているので、今後取り組んでいきたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用者の日常の様子や表情・会話から言葉にならない本人の思いや願いを知ろうと努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時にご家族から要望やご意見を伺っている。日頃から些細なことでもご家族に連絡して関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の申し送りから問題点を把握して、迅速に対応するように努めている。また、担当者会議や面会の際などに、日常の様子や問題点を報告して、ご意見を聞いて対応を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	季節の行事を一緒に楽しんだり日常の家事を共に行い、人生の先輩として経緯を表すように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族と積極的にお話して情報を得たり、「私の人生の歩み」というご利用者のこれまでの人生をご家族に記入して頂き、その方らしい生活を送って頂くように努力している。誕生日会や行事などで一緒に過ごす時間を持つように努力している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所の方や友達が面会に来られたり、買い物時に近所の方に遭遇することもあった。	「思い出の地巡り」として年1回、入居者の望みに沿って行きたい所へ出かけられるような支援を目指している。これまで菊池神社・孫の結婚式・動物園・自宅・お墓参りなどへの外出を実行し、入居者と家族に喜ばれている。支援する職員の達成感と喜びにも繋がっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事をリビングで行い、レクリエーションや余暇時間で一緒に外出を行い、ご利用者同士が顔を合わせて会話できる環境を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も葬儀に参列したり、ご家族に連絡を行い、精神面のフォローを行ったり、居宅介護支援事業所と情報共有を行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	関わりの中で言動や表情からご利用者の意思を確認している。ケアを検討する時、常にご利用者主体で考えるように努めている。	職員は入居者の日頃の表情・言葉・動作等から思いの把握に努め、気づきは記録に残して共有している。入居者が、新聞に掲載された大学入試の数学問題に取り組んだり、出身高校の校歌を大声で歌っている様子等を家族に伝え、生活歴などから思いの把握に努め、浮上してくる様々なことをケアプランに活かすなどして、キラキラと輝きながら過ごせる暮らしの支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご利用者やご家族からこれまでの生活歴や嗜好を聞き、好まれていることを取り入れるよう努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人生活リズムに合うように、その方にあつた対応をしている。一人一人の能力の把握を行い、ミーティングなどご利用者について話す機会を作っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご家族からの聞き取りを行った意向や、医療機関とも情報共有を行い現状を把握して、反映させた計画書を作成している。	本人の思いや要望などを大切に、家族の要望も把握して一人ひとりの特徴に沿ったケアプランを作成している。	全職員がケアプランの内容を十分に把握し、ケアプランに沿った支援の実践と記録となるような取り組みも期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の申し送りや記録、ミーティングでの話し合いから、職員間での情報の共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	当日に外出を計画したり、頂いた野菜で献立を考案したり、会話で出たおやつを提供するなど、柔軟に対応するように努めている。また、訪問サービスなどご利用者やご家族の希望に沿ったサービスを提供できるよう情報提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物や外食、地区の行事等で地域に出向いており、少しずつ地域との交流が進んでいるが、まだ少ない現状である。今後はより積極的に地域に目を向けたいと考えている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的に主治医の診察を行い体調管理を行っている。診療の様子はご家族に伝え、時間を合わせて出席されるように勧めるなど、納得を得られるように支援している。	入居時にかかりつけ医の継続受診・協力医への変更等は自由に選択できるが、緊急時以外の受診同行は家族が行うことが基本となっている。訪問看護での体調管理や訪問歯科による口腔ケア環境も整えられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護ステーションと契約しており毎週1回定期訪問で、体調の変化に対して相談し助言を頂いている。必要時には、主治医へ連絡を行っており連携できている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院へ出向き本人やご家族と会うように努めている。病院の担当者や会うだけでなく、こまめに電話で情報交換を行い、退院前カンファレンスに参加するなどして、できるだけ早期の退院を目指すよう努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に、重度化した場合に備えて、事前の意向を確認している。看取りを行う姿勢はご家族に伝えており、実施もやっている。	入居時に「重度化した場合に於ける対応に係る指針」に基づいて説明し同意を得ている。重度化した際はその都度家族の意向を確認し、要望と状態に応じて医療機関への搬送・特養への移動・看取りを行う等、適切に対応することとしている。看取り後はグリーンケアやデスカンファレンスを行い、遺族・職員の心のケアにあたっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	経験のない職員から不安との声が上がったために、実技で学ぶ機会を持ったが、まだまだ不十分と感じているので、今後取り組んでいきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を実施し、未経験の職員が対応できるように調整しているため、少しずつ対応方法が実技で習得できている。地域住民とも協力体制もこれから課題になっている。	入居者も参加して夜間の火事を想定した火災避難訓練を9月に実施している。訓練後の振り返りでは、夜間の停電に備えヘッドライト付きのヘルメットの必要性や、一旦避難した入居者の見守りなど具体的な課題について話し合い、改善に向けた取組を行って災害に備えている。次年度は、水害時の避難訓練も実施する予定となっている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	敬語で接し、一人一人ご利用者に合った尊重した言葉を使うようにしている。日頃から言葉かけについては一覧表を掲示して正しい言葉遣いに努めている。不適切な声掛けがあった場合には注意しあうように努めている。	排泄の声掛けや確認時は声の大きさや表現に配慮している。自室に鍵を掛けたい人、一人で過ごしたい人等、入居者其々のペースでプライバシーを損ねない環境を大切にしている。言葉遣いは、入居者のみならず職員間でも敬語を使うことを心掛け、一人ひとりの尊重に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、一人一人の意思確認を行ってケアを行っている。飲み物などでも、自己決定できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務の流れはあるが、ケアについてはご利用者のその日の状態やペースに合わせて行うよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	散髪などでも染髪やカット、パーマなど一色単にならないように選ぶ環境作りを行っている。マニキュアや帽子、化粧などでおしゃれを楽しんで頂けるよう努めている。服の種類もこれまで以上に本人に選定してもらうように努めていきたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	日常では管理栄養士が作成した献立表をベースにしているが、行事や誕生日会、その日食べたいものや、頂いた食材の活用などを行い、柔軟に対応している。ご利用者と一緒に調理、おやつ作りを行い、食べる楽しみを持つよう心掛けている。	食事とおやつは、職員と入居者が一緒に台所に立ち、楽しみながら調理している。自肅前までは、ファミリーレストランやフードコートに出向き外食を楽しむ支援も行っていたが、現在はホームの広い庭でおやつを食べるなど、気分転換に配慮し、楽しい食事となるように工夫して支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分摂取量を把握して、少ない場合には職員間で共有して、ゼリーなどを提供して摂取量が確保できるようにしている。主治医と連携し、嚥下状態の把握に努めてご利用者に合った食事形態を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に必ず口腔ケアを実施している。必要な利用者に対しては職員が仕上げ磨き、確認を行い清掃を保っている。歯科訪問診療に毎週1回来て頂き、定期的に専門家による口腔ケアを行い、日常のケアについて相談・助言を頂く機会を作っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表にて一人一人の排泄パターンの把握を行ってトイレでの排泄を支援している。また使用しているパットが本人の状態に合っているか常に検討を行い、おむつゼロの方針の基、布パンツを使用するなど、不快に感じないように取り組み、排泄の自立に向けて取り組んでいる。	法人全体で「おむつゼロ」を目指しており、現在、ホームではオムツゼロの目標を達成した状況にある。皮膚トラブルの減少・コストの削減など、様々な効果が出ており、入居者と家族から感謝の声が寄せられている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日夜勤者が排便の有無を最終確認して、必要時には申し送り、必要分の下剤の与薬を行っている。毎日のヨーグルト摂取やマッサージの他、食物繊維などの摂取で下剤を減らすよう取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴に気分が乗らない時には無理をせず、夜間や別日に声をかけたり、ご利用者の意向を確認している。個浴で、希望に合った温度設定と、毎のお湯の入れ替えを行ったり、入浴中に水分を提供するなど、気持ちよく入浴できるよう心掛けている。	週に2回の入浴を基本としている。熱め・ぬるめなど個々の要望に沿った温度に設定し、好みの入浴剤の使用や、ゆず湯・菖蒲湯等、季節感にも配慮してゆっくりと入浴を楽しむことができるように支援している。温泉の足湯に出かけることもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご利用者の希望や状態に応じて日中に臥床される方もいる。夜間の不眠に対しては無理に寝て頂こうとせず、離床して話を傾聴したり、ホットミルクを提供するなどして落ち着いて頂けるように工夫している。できる限り過剰に眠剤を使用しないよう主治医と連携して減量している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変更した時には、注意点まで合わせて申し送るようにして、状態の変化の観察を行っている。薬の作用が十分に理解できていない職員もいるため伝達が必要である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	調理や洗濯などの家事の中で、行ってきた習慣を維持できるように支援している。毎日のレクリエーションの他、季節行事や外出などを積極的に計画し、楽しんで頂けるように努力している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家に帰りたいなどの希望をかなえることが難しい場面があるが、買い物や散歩で外に出る機会を作るようにしている。ご利用者の思い出の地を巡る機会を作り、個別のニーズに合わせた外出支援を行ってきたので、今後も継続したい。	食材購入に近くのスーパーに出かけたり、ホーム周辺を散歩したり、庭にテントを張って花見をするなどして外出を楽しみ、季節の変化を感じ、ストレスが軽減できるように支援している。また、「思い出の地巡り」として、年に一度、入居者其々が行きたいところに行けるように、職員は入居者の望みを把握し、綿密な計画をたてて準備を行い実施している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状では自分で管理されている方はいない。日常の買い物などで、財布を渡して支払いを支援するなど、使う機会を持つことはできると考えているが、現状では気が付いた時に行っている程度なので積極的に取り組んでいきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご利用者の希望がある時には電話を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	お花を飾ったり、壁面飾り、写真を掲示するなど季節感を味わって頂けるように工夫している。温度や冷暖房器具の使用など、ご利用者の希望に沿って対応するように努めている。玄関の開閉には猫の鳴き声センサーを使用して、自然な雰囲気の中で安全に配慮できるよう工夫している。	二つのユニットのキッチンとリビングは繋がっており、広々とした空間にオレンジと緑の椅子やソファが置かれ、開放感・清潔感のある明るい環境となっている。お雛様などの飾り物で季節感を表現している。ソファで横になったり、テーブルで新聞を読んだり、仲良しの入居者とテレビを見るなど、ゆったりと自由に過ごせる居心地の良い共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	全体的には食事の時の席が習慣化してきてはいるが、特に固定はしておらず、その時と気分に応じて、ソファで過ごしたり、いつもとは違う席で過ごしたり、ご利用者同士の関係性や気分で、思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族に馴染みの物を持ってきて頂くように声をかけている。季節ごとのカードやご家族からのメッセージなどを掲示して、本人らしい空間になるように努力している。	入居者の状態に応じて生活しやすいようにベッドや家具の位置に配慮している。壁紙に合わせた色のカーテンが掛けられ窓からは近隣の住宅が見える。室内には、整理ダンスや仏壇、ちゃぶ台など、其々の心地よさに配慮された部屋づくりが見られた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	台所はご利用者が使用できるよう広く作られており、多人数で調理を行うことができる。必要に応じて目線の高さに部屋の名前や、トイレに「トイレ」と掲示するなどして、認知症によって困っている状況が軽減できるよう工夫している。		